

## 第四章 浮舟の物語 浮舟、尼君留守中に出家す

[第一段 九月、尼君、再度初瀬に詣でる]

九月になりて、この尼君、初瀬に詣づ(九月になると、この尼君は初瀬に参詣します)。年ごろいと心細き身に(姫が亡くなって五年あまり、とても張り合いの無い暮らしに)、恋しき人の上も思ひやまれざりしを(恋しい娘のことが忘れられなかったが)、かくあらぬ人ともおぼえたまはぬ慰めを得たれば(このように別人とも思えなさらぬ姫を身代わりに身近に置けたので)、観音の御験うれしとて(観音の靈験に感謝して)、返り申しだちて(御礼を申し上げるために)、詣でたまふなりけり(参詣なさるのでした)。

「いざ、たまへ(さあ、あなたも一緒にお参りしましょう)。\*人や知らむとする(道中も、誰にも見つからずに済みますから、心配ありません)。\*同じ仏なれど(初瀬観音は本山の薬師如来と同じ尊仏ですが)、さやうの所に行ひたるなむ(あそこのお寺で念仏しますと)、験ありてよき例多かる(縁結びの効験が良く現れる事が多いのです)」 \*「人や知らむとする」は<誰にも分からない>みたいな言い方のようなのだが、何の何が分からないのか、が分からない。で、多分、人目を避けて暮らしている常陸女なのだから、外出して、それも縁がありそうな宇治方面の大和路を旅して、以前の知り合いにでも遇ったら非常に困るだろうが、車に隠れていれば<誰にも(あなたの正体は)分からない>という意味だろうと、私は考える。が、そうだとすると、是は如何にも重要事項なので、「人や知らむとする」の一言で説得できる事柄ではない。勿論、実際には多くの言葉を弄したが文面では要旨を簡潔に記すということはあって当然で、その編集こそが執筆なのだが、それにしても是は省語が過ぎる。それでも、他の意味も思い付かないので、この分かり難さには非常に不満ながらも、左様明示補語する。 \*「おなじほとけなれど〜」は実質で行楽の方便だと私は思うが、同時に優れた方便はヒトの総合的な英知だろうとも思うが、比叡山の尼僧が初瀬寺詣りをするには、普通以上の尤もらしい理屈が無いと説得力に欠ける気がして言い換えに工夫したが、本当のところ分からないので上手く言える訳が無い。

と言ひて(と尼君は言つて)、そそのかしたつれど(姫君を誘つたが)、「昔、母君、乳母などの、かやうに言ひ知らせつつ、たびたび詣でさせしを、かひなきにこそあめれ(昔、母君や乳母がそのように私に言い聞かせて、長谷寺には何度も参詣させたが、幸せな出会いは無かった)。命さへ心にかなはず(死ぬことも出来ず)、たぐひなきいみじきめを見るは(この上なく辛い目に遭っている)」と、いと心憂きうちにも(と、参詣におよそ気が進まない上に)、「知らぬ人に具して(素性もよく分からない人と一緒に)、さる道のありきをしたらむよ(大和路を旅するというのか)」と、そら恐ろしくおぼゆ(と常陸女は計り知れない恐ろしさを感じます)。

心ごはきさまには言ひもなさで(ただし常陸女は、その初瀬観音の御利益への懸念を真面に持ち出して強硬に反論したりはしないが)、

「心地のいと悪しうのみはべれば(気分がとても悪い一方でした)、さやうならむ道のほどにもいかがなど(そうした長旅に体力が堪えられるかと)、つつましくなむ(心配です)」

とのたまふ(と仰います)。「物懼ぢはさもしたまふべき人ぞかし(姫が宇治方面を怖がりなさるのは当然だ)」と思ひて(と尼君は思つて)、しひても誘はず(無理強いはしません)。

「はかなくて世に古川の憂き瀬には、尋ねも行かじ二本の杉」(和歌 53-11)

「憂き世なら 会う約束も 辛いだけ」(意訳 53-11)

\*注に<浮舟の独詠歌。『異本紫明抄』は「初瀬川古川野辺に二本ある杉年を経てまたもあひ見む二本ある杉」(古今集旋頭歌、一〇〇九、読人しらず)を指摘。>とある。この引歌は以前にも玉鬘卷三章九段の玉鬘と右近の再会場面にも引かれていた。舞台は正しく初瀬寺だった。で、ざっと引歌は<初瀬川と布留川が合流するように長谷寺の‘二股の杉’の木の下で再会を誓いましょう>みたいな話らしい。つまり、「ふたもとのすぎ」は再会の目印・象徴だ。「(世に)経る」と「布留(川)」の掛詞。「布留川」と「二本の杉」、「川」と「瀬」は縁語、「はかなし」「世」「憂し」も縁語なのだろうか。

と手習に混じりたるを(という詠歌が姫の習字紙の中にあるのを)、尼君見つけて(尼君は見つけて)、

「二本は(ふたもとは、この歌に‘二本の杉’とあるのは)、またも逢ひきこえむと思ひたまふ人あるべし(再会申したいとお思いの人がいるに違いない)」

と、戯れごとを言ひ当てたるに(と軽口で姫の宮様恋しの本音を言い当てたので)、胸つぶれて(姫は恥ずかしさに)、面赤めたまへる(おもてあかめたまへる、赤面なさったのが)、いと愛敬づきうつくしげなり(とても人懐こくて可愛らしいのでした)。

「古川の杉のもとだち知らねども、過ぎにし人によそへてぞ見る」(和歌 53-12)

「二股は 会うと別れの 行き帰り」(意訳 53-12)

\*注に<妹尼君の返歌。「古川」「杉」の語句を用いて返す。「古川の杉」は浮舟を喩える。「過ぎにし人」は亡き娘。>とある。「もとだち」は「元裁ち」で<根元近くの幹の分かれ目>のこと、かと思う。同じ「二本の杉」を<合流→再会>と見るか<支流→別離>と見るかの視点の違い。尼君はこういう機転は利くヒトだ。筋は<あなたの古く過ぎた別れた相手は知らないが、私は故君を思い出す>だろうか。

ことなることなきいらへを\*口疾く言ふ(尼君は特にどうという情緒も無い返歌を素早く詠みます)。 \*「くちとくいふ」が当意即妙になるとは限らないが、即答は尼君の真骨頂らしい。数打ちや当たるとも限らないが、打たなきゃ絶対に当たらない。

忍びて(今度の初瀬詣では、目立たないように少人数で参ります)、と言へど(と尼君は言ったが)、皆人慕ひつつ(女房が皆慕って付き添うので)、ここには人少なにておはせむを心苦しがりて(この尼庵には人手が少なくなつて、姫が不自由なさるのを案じて)、心ばせある少将の尼(いろいろな事情を心得ている少将尼と)、\*左衛門とてある大人しき人(左衛門という年配の尼女房)、童ばかりぞ留めたりける(それに童女だけを残したのでした)。 \*「さゑもん」は注に<初出の女房。『完訳』は「中将の訪問を予測しての用意である」と注す。>とある。

## [第二段 浮舟、少将の尼と碁を打つ]

皆出で立ちけるを眺め出でて(皆が出発したのを見送って)、\*あさましきことを思ひながらも(我が身のやりきれなさを思いながらも)、「今はいかがせむ(今はどうしようもない)」と(と此処に留まり)、「頼もし人に思ふ人一人ものしたまはぬは、心細くもあるかな(頼りに思える人が誰も居らっしゃらないのは心細い)」と、いとつれづれなるに(と手応え無く暮らす姫君に)、中将の御文あり(中将からお手紙がありました)。 \*「あさましきこと」は注に<『完訳』は「物思いのうちに、わが身の上の情けなさを思う。失踪以来のあまりにも心外ななりゆき」と注す。>とある。

「御覽ぜよ(お読み下さい)」と言へど(と少将尼は言うが)、聞きも入れたまはず(姫は聞き入れなさいません)。いとど人も見えず(いっそう人目を避けて部屋に籠もり)、つれづれと来し方行く先を思ひ屈じたまふ(ぼんやりと過去と未来を考えて人生を悲観なさいます)。

「苦しきまでも眺めさせたまふかな(見ている私が辛いほど嘆いていらっしゃいますね)。御碁を打たせたまへ(碁をお打ちなさいませ)」

と言ふ(と少将尼が言います)。

「いとあやしうこそはありしか(私は全く下手でした)」

とはのたまへど(と姫は仰ったが)、打たむと思したれば(打つ気にお成りだったので)、盤取りにやりて(下女に碁盤を運び込ませて)、我はと思ひて(こんな浮世離れした人に自分が負けるはずが無いと思って)先ぜさせたてまつりたるに(姫に先手を打たせ申し上げたが)、いとこよなければ(姫がすこぶる強いので)、また\*手直して打つ(再度自分が先手で打ち直します)。 \*「手直して打つ」は注に<先手後手を変えて打ち直す。>とある。

「\*尼上疾う帰らせ\*たまはなむ(尼上は早くお帰りになれば良いのに)。この御碁見せたてまつらむ(この姫の碁の腕前を見ていただきたい)。かの御碁ぞ、いと強かりし(尼上も碁はとてもお強かった)。\*僧都の君(僧都の兄君は)、早うよりいみじう好ませたまひて(子供の時から碁をたいそう好まれました)、\*けしうはあらずと思したりしを(ご自分ではなかなかの腕前だと思いだだったので)、『いと\*棋聖大徳になりて(何も棋聖と言われた寛蓮上人気取りになって)、さし出でてこそ打たざらめ(でしゃばる心算は無いが)、御碁には負けじかし

(あなたの碁には負けません)』と聞こえたまひしに(と尼上に挑み申しなさったが)、つひに僧都なむ二つ負けたまひし(結局は僧都が二敗なさったのです)。棋聖が碁には勝らせたまふべきなめり(あなたも棋聖にお勝ちなさるに違いない)。あな、いみじ(何と強いこと)」 \* 「あまうへとう」は注に<以下「あないみじ」まで、少将尼の詞。>とある。少将尼などの尼女房は娘尼君を、少なくとも三人称では「あまうへ」と呼称していたらしい。 \* 「たまはなむ」の「なむ」は、尊敬の補助動詞「給ふ」の未然形に付けた語用で、第三者の(反実)仮想言動を客観事態として期待する言い方らしく、言い切りの終助詞とされているようだが、反実仮想だから下に「望まし」くらいが省かれた言い差しの係助詞のようにも見える。 \* 「そうづのきみ」の「君」は、「僧都」が高位の僧の役職名なので其自体が敬称であり、其処に付ける「きみ」は敬称ではなく身内を言う親称としての語用なのだろう。 \* 「けしうはあらず」は注に<碁の腕前はまんざらではない。>とある。「けし」は「怪し・異し」と古語辞典に漢字表記があり<異常である。薄情だ。>と語用例示がある。「けしう」はその副詞語用で<異常の様相=異常なほどだ=非常に>という事物を一定基準に照らして並外れて劣るといふ低評価を示す言い方であるようだ。だから、「けしうはあらず」は<そんなに酷くはない→まんざらでもない>となるのだろう。因みに、現代語にも引き継がれていると思われる「けしからん」だが、是は古語では「けしからず」とあって<けしくあらず=けしうはあらず>という語用のようにも見えるが、この語の意味は<非常に不都合だ>と逆になっているから、むしろ現代語の「けしからん=けしからむ=けしくあらむ(非常に劣るだろう)」という言いの方が理に適う。だから多分、「けしからず」は<けしからむ→けしからん→けしからぬ→けしからず>と変化した音便語用なのだろう。「ず」の音感は「ぬ・ん・む」よりも明瞭で強いので言い切りの語調に合致したのだろう。が、「ず・ぬ」は打ち消しの助動詞と混同しがちだ。で、誤用を避ける意志が働いて、現代語には元の「けしからん」が採用された。とか考えてみたが、どうなんだろう。 \* 「棋聖大徳(きせいだいとこ)」は注釈が無いが訳の分からない語だ。「棋聖」でウェブ検索すると読売新聞社主催の「棋聖戦」ばかりがヒットして、どうも道程が遠い。で、「碁聖」で調べるとウィキペディアに<平安時代の寛蓮が最も早い時期に碁聖と呼ばれた人物とされる。>とあり、「寛蓮(かんれん、874—? 平安時代中期の僧)」は<貞観(じょうがん)16年生まれ。宇多天皇に、その譲位後もつかえる。囲碁の上手で、あるとき金の枕を賭けて天皇と対局したとつたえられる。また京都に弥勒(みろく)寺をたてたという。肥前藤津郡(佐賀県)出身。俗名は橘良利。>とデジタル版日本人名大辞典+にある。取り敢えず、この人を当て込む。

と興ずれば(と少将尼が面白がると)、さだ過ぎたる\*尼額の\*見つかぬに(年老いた尼の短髪を見慣れない上に)、もの好みするに(子供のように勝負に熱中する姿の気色悪さに)、「むつかしきこともしそめてけるかな(余計な事に手を出してしまった)」と思ひて(と姫は思つて)、「心地悪し(気分が悪い)」とて臥したまひぬ(と言って寝てしまいなさいました)。 \* 「尼額(あまびたひ)」は「尼削ぎ(あまそぎ)」をした髪型で、「尼削ぎ」は<尼のように肩のあたりで切り揃えた髪形。子供の髪形の一つ。>と古語辞典にある。老人の子供っぽい姿や仕草が気持ち悪い、ということらしい。 \* 「見付く」は<見慣れる>と古語辞典にある。

「時々、晴れ晴れしうもてなしておはしませ(時々はこのように、気晴らししてお過ごしなさいませ)。あたら御身を(せっかくの若い身空なのに)、いみじう沈みてもてなさせたまふこそ口惜しう(ひどく沈んでいらっしやるのは残念で)、玉に瑕あらむ心地しはべれ(玉に瑕のような気がします)」

と言ふ(と少将尼は言います)。夕暮の風の音もあはれなるに、思ひ出づることも多くて(夕暮れの風も物悲しく、母や乳母が懐かしく思い出されることも多く、姫はこう詠みます)、

「心には秋の夕べを分かねども、眺むる袖に露ぞ乱るる」(和歌 53-13)

「失恋に限らず 秋は泣けてくる」(意識 53-13)

\*「あきのゆふべ」は<秋の物悲しい情緒>だろうが、それに感じ入って詠んだ歌が「分かねども」とはナゾナゾ問答か。まあ、こういう場合、「秋」が「飽き」に掛かっていると読むのは約束事みたいなもんらしく、「飽く」は人間関係なら特に<男女間の恋愛感情に於いて相手が嫌いになる>という意味で語用されるようで、親子や兄弟などの縁戚関係は確かに「飽きる」対象ではないし、その他の一般的な社会生活上の人間関係も「飽きる」かどうかという個人的な興味ではなく、「役立つ」かどうかという機能性に於いて評価される。しかし、殊更に<失恋>を持ち出すのは、そういう感情にこだわっている証左かもしれない。ところで、ヒト個人が未来へ命を繋ぐ責任を果たすには、見えない未来に賭けるのだから、一方で現在の生活が成り立つように冷静な物量管理の計算はしつつも、一方では計算を超えた「飽きない」興奮状態で子育てをするしかないし、そのように仕組まれてもいるのだろう。現実には有限の形でしか存在しない。または、あらゆる事象は変化の一局面だということは、畏らく物理原理だ。

[第三段 中将来訪、浮舟別室に逃げ込む]

月さし出でてをかしきほどに(月が出て風流な宵闇に)、昼文ありつる中将おはしたり(昼に手紙のあった中将がお見えになりました)。「あな、うたて(まあ、いやだ)。こは、なにぞ(尼上のお留守に、是は何としたことか)」とおぼえたまへば(と姫は思いなさって)、奥深く入りたまふを(奥の部屋に隠れてお入りになるのを)、

「さも(そのようにお隠れになるのは)、あまりにもおはしますものかな(あまりに素っ気なくいらっしゃいます)。御心ざしのほども(中将殿がお見えになったのも)、あはれまさる折にこそはべるめれ(一際人恋しい季節柄なればこそでしょう)。ほのかにも(少しだけでも)、聞こえたまはむことも聞かせたまへ(中将殿の御話をお聞きなさいませ)。\*しみつかむことのやうに\*思し召したるこそ(お話しなされるだけで、深い仲になるようにお考えなのは、子供じみています)」 \*「染み着く」は<浸み込む→離れない→縁が切れない>みたいなことだろうか。何か引歌があるのではないか。是だけでは非常に分かり難い言い方だ。 \*「思し召したるこそ」は下に<若々しけれ>などが省かれた文と読んで置く。

など言ふに(と少将尼が言うのを)、いとはしたなくおぼゆ(姫はとても情けなく思えます)。おはせぬよしを言へど(少将尼は中将に尼君のご不在を言うが)、昼の使の(昼に来た文遣いが)、一所など問ひ聞きたるなるべし(姫が一人残っていることを聞き出していたようで)、いと言多く怨みて(手紙の御返事が無いことに、いろいろと不満を言い立てて)、

「御声も聞きはべらじ(お声を聞こうとは思いません)。ただ、気近くて聞こえむことを(ただ近くで、直接お話し申すことを)、聞きにくしともいかにも(厭な話かどうか)、思しことわれ(お考え下さい)」

と、よろづに言ひわびて(と中将は、いよいよ話に困って)、

「いと心憂く(何と情けない)。所につけてこそ(こういう寂しい所だから)、もののあはれもまされ(人肌恋しさも増さるといふのに)、あまりかかるは(是ではあまりに薄情な)」

など、\*あはめつつ(と姫の固辞に閉口しつつ)、 \*「あはむ」はくうとんずる。けいべつする。けなす。>と古語辞典にある。が、けなそうと軽蔑しようが無反応な相手に対しては一人相撲でしかないので、語意が成立しない。だから、是は姫に対する態度ではなく、中将自身の気分を言っているとすれば、浅い・軽い・薄い感触→手応えが無い→手立てが無い→閉口する、あたりになりそうだ。

「山里の秋の夜深きあはれをも、もの思ふ人は思ひこそ知れ (和歌 53-14)

「やさしさが 通じないとは 情けない (意識 53-14)

\*こんな物寂しい夜は、辛い事情がある者同士なら、尚更相身互いで分かり合えるはずなのに、とは実に尤もな考えで、まして身分のある中将に言い寄られて、拒む女が居るなんて信じられない、と尼君も少将尼も思うのだろう。

おのづから御心も通ひぬべきを(辛い者同士だからこそ、自然に分かり合えるはずなのに)」

などあれば(と姫に贈歌があったので)、

「尼君おはせで(尼君がいらっしゃらないので)、紛らはしきこゆべき人もはべらず(他に上手く取り繕って返歌出来る者もいません)。いと世づかぬやうならむ(ご自身で返歌申しなさいませんと、ひどく失礼になります)」

と責むれば(と少将尼が姫に迫ると)、

「憂きものと思ひも知らで過ぐす身を、もの思ふ人と人は知りけり」(和歌 53-15)

「やさしさの 押し売りなんて 流行らない」(意識 53-15)

\*常陸女の初めての返歌であり、返事である。が、突慳貪なオウム返しだ。が、中身は元々どうでも良い。中将の贈歌も結構辛気臭い。応えた事自体が貴重だ。だから常陸女は頑なに返事を拒んだ。「染み付く」と思うのは決して子供じみてなんかいない。関わるのが怖いから、一気に染まらないことは何の救いにもならない。徐々に染まるなら、恐怖はいつそう深まる。

わざといらへともなきを(特に詠んだというほどのこともない、ただの返事のような姫の返歌を)、聞きて伝へきこゆれば(少将尼が聞き伝えて中将に申し上げると)、いとあはれと思ひて(中将は初めての姫の返歌に感激して)、

「なほ、ただいささか出でたまへ(どうか少しだけでも出て来ててください)、と聞こえ動かせ(と姫にお勧め申せ)」

と、この人びとをわりなきまで恨みたまふ(と少将尼や左衛門を困らせるほど懇願なさいます)。

「あやしきまで(しかし姫も全くお会いなさらないのは、異様なほど)、つれなくぞ見えたまふや(冷淡に見えなさる)」

とて(と少将尼は思って)、入りて見れば(姫の部屋に入って見ると)、例はかりそめにもさしのぞきたまはぬ\*古い人の御方に入りたまひにけり(姫は普段なら間違っても向かいなさらない大奥の大尼君のお部屋に入っていたのです)。あさましう思ひて(その頑固さに少将尼も呆れて)、「かくなむ(こういう次第です)」と聞こゆれば(と中将に申し上げると)、 \*「おいびとのおおんかた」は<大尼君のお部屋>で、大尼君が厄介な人なので、其処へ逃げ込めば少将尼も煩く追っては来ない、ということのようだ。が、唐突で分かり難い展開だ。

「かかる所に眺めたまふらむ心の内のあはれに(こういう物静かな尼庵で思い悩んでいらっしやるような心境は憐憫の情に篤く)、おほかたのありさまなども(全体の印象も)、情けなかるまじき人の(風情が無くもなさそうな人が)、いとあまり思ひ知らぬ人よりも(そういう教養も無い卑しい者よりも)、けにもてなしたまふめるこそ(無下な応対をなさるとは)。それ物懲りしたまへるか(何か特に懲りたような男女の揉め事でもあったのだろうか)。なほ(今だに)、いかなるさまに世を恨みて(どういう事情で世を恨んで)、いつまでおはすべき人ぞ(いつまで嘆くお心算か)」

など、ありさま問ひて(と中将は少将尼に事情を尋ねて)、いとゆかしげにのみ思いたれど(ぜひとも知りたく思ったが)、こまかなることは(詳しい事情は)、いかでかは言ひ聞かせむ(分からないので、何とも答えようがありません)。ただ(少将尼はただ)、

「\*知りきこえたまふべき人の(尼君が御世話申しなさるべき人で)、年ごろは、疎々しきやうにて過ぐしたまひしを(長年疎遠になっていらっしやったのを)、初瀬に詣であひたまひて(互いに初瀬詣でで出会いなさって)、尋ねきこえたまひつる(縁故がお分かり申しなさったのです)」 \*「知る」は此処では<管理する。世話する。守る。>くらいの言い方らしい。注には<『完訳』は「遠縁にあたるぐらいの趣」と注す。>とある。尼君が女房たちに言っていた説明だ。

とぞ言ふ(とだけ言います)。

#### [第四段 老尼君たちのいびき]

姫君は、「いと\*むつかし」とのみ聞く\*古い人のあたりにうつぶし臥して、\*寝も寝られず(姫君はとても気味が悪いとばかり聞いている大尼君の部屋で横になっていたが、寝付けません)。 \*「むつかし」は<不快だ。いやだ。>また<煩わしい。面倒だ。>ともあるが、下文に続く文意からすると、此处では<気味が悪い。恐ろしい。>という言い方らしい。 \*「おいびと」は<大尼君>だろうが、この人が尼庵の大主人かと思えば、私にはどうも粗略な扱いに聞こえる。また、この人が初瀬の帰りで体調を壊したことで尼庵一行は宇治院に寄ることになり、そこで常陸女は拾われたのだが、死に切れなかった常陸女にしてみれば、別にこの人を感謝する筋合いではないのかもしれないもの、かといって、恨む筋合いでもないし、是が常陸女目線での語りなら少し不遜な印象にもなるところだ。が、「姫君」という言い方からすると、是は女房目線なのだろうか。とすると、少将尼はこの場に居ないので視点の臨場感には欠ける気はする。とにかく、私には何かがつくり来ない文だ。 \*「寝も寝られず(いもねられず)」は<寝付けない>という言い方らしい。どこか変な言い方に聞こえるし、以前から、この「寝(い)」と「寝(ぬ)」の二語は私の中で落ち着きが悪い。「寝(ぬ)」がもともとは「寝ぬ(いぬ)」だったという説明も、だからどうだと納得できる手応えは私の中には無い。ただ何となく、語感としては「寝(い)」が<睡眠>で、「寝(ぬ、寝る)」が<休む、横になる>という語意のように思える。現代語でも「寝る(ねる)」は必ずしも<睡眠を取る>ということではないし、睡眠を取るなら「眠る(ねむる)」と言う。「いぬ」は「往ぬ(行き去る)」に近い語で<意識が無くなる>みたいな概念が元にあったのかも知れない。と考えてみても、然して整理された気もしないが、「いびき」は元は「寢息(いいき)」で、その煩さに見合う語感として「いびき」と音便されたのかもしれない、などと連想した。

宵惑ひは(老人の早寝は)、えもいはずおどろおどろしきいびきしつつ(何とも言えず不気味ないびきを立てて)、\*前にも(その大尼君の前にも)、\*うちすがひたる尼ども二人して(付き従う尼の二人して)、劣らじといびき合はせたり(大尼に負けずいびきを掻き合っていました)。いと恐ろしう(常陸女は本当に恐ろしく)、「今宵、この人びとにや食はれなむ(今夜、この人たちに食われてしまう)」と思ふも(と思うにも)、惜しからぬ身なれど(惜しくはない身だが)、例の心弱さは(生来の気弱さから)、一つ橋危ふがりて帰り来たりけむ者のやうに(宇治橋から身を投げるのを怖がって引き返した者なので)、わびしくおぼゆ(怯えています)。 \*「まへ」は貴人の前なら「御前」だろうに、何故「御」の敬語が無いのか。不思議だし、むしろ「御」があった方が不気味さに重々しさが増して効果的にも思える。 \*「うちすがふ」は古語辞典に「打ち次ふ」と表記があり<比類する。よく似る。>と現代語言い換えがある。「次ぐ」なら<付き従う>でも良さそうだ。

こもき(常陸女は童女のコモキを)、供に率ておはしつれど(この奥部屋に連れて来ていらっしやったが)、色めきて(コモキは面白がって)、このめづらしき男の艶だちみたる方に帰り去にけり(この目を引く男が色気づいて座している表向きの部屋の方へ帰って行ってしまいました)。「今や来る、今や来る(何時帰ってくるのか)」と待ちゐたまへれど(と常陸女はコモキを待っていらっしやったが)、いとはかなき頼もし人なりや(全く当てにならない世話係なのでした)。中将、言ひわづらひて帰りにければ(中将は、姫が大尼君の部屋に逃げ込んだと聞かされて、言葉も無く帰って行ったので)、



「いと情けなく(本当に情けなく)、埋れてもおはしますかな(籠もっていらっしゃるものです)。あたら御容貌を(惜しい女盛りなのに)」

などそしりて(などと少将尼らは姫に不平を言って)、皆一所に寝ぬ(皆一緒に南廂の部屋で眠りました)。

「夜中ばかりにやなりぬらむ(もう真夜中だろうか)」と思ふほどに(と姫が思う時分に)、\*尼君しはぶきおぼほれて起きにたり(大尼君が咳き込んで寝ぼけて起きてきました)。火影に(部屋灯りに見える)、頭つきはいと白きに(尼君の髪がとても白い所に)、黒きものをかづきて(黒頭巾を被って)、この君の臥したまへる(この姫君が寝ていらっしゃるのを)、あやしがりて(怪しがって)、鼬とかいふなるものが、さるわざする(イタチとかいうものがするように)、額に手を当てて(尼君が姫の額に手を当てて)、 \*「あまぎみ」と此処では呼称している。この文では「思ふほど」と常陸女にも敬語が無いので、是は常陸女目線の語りなのだろうか。どうも、言い換え文の主語表記も「常陸女」と「姫君」の使い分けが面倒でしようがない。混同して、適切さに全く自信が持てない。まあ、文意が通ればよしとして置く。

「あやし(おや、女房ではない)。これは、誰れぞ(これは誰ですか)」

と、執念げなる声にて見おこせたる(と執念深そうに思える遅い口調で顔を覗き込んでくのが)、さらに(いよいよ)、「ただ今食ひてむとする(今正に食いつこうとする)」とぞおぼゆる(形相に見えます)。\*鬼の取りもて来けむほどは(むしろ、入水の際に鬼が私を拐って来た時は)、物のおぼえざりければ(何が起こっているのかも分からなかったので)、なかなか心やすし(却って気楽だった)。 \*「おにのとりもてきけむほど」は注に<入水しようとしていた時に物の怪に連れ出されたことを回想。>とある。

「\*いかさまにせむ(どうする気だろう)」とおぼゆるむつかしきにも(と、今は正気で大尼君の姿に覚えている気味悪さにも)、「いみじきさまにて生き返り(本当の鬼に拐われた時は、惨めな姿で生き返り)、人になりて(人に戻って)、またありしいろいろの憂きことを思ひ乱れ(また昔の嫌なことを思い出しては)、むつかしとも恐ろしとも(中将殿の言い寄りを忌避すべき大変な事と)、ものを思ふよ(つくづく思っているわけだ)。\*死なましかば(が、あの時に死んでいたなら)、これよりも恐ろしげなる者の中にこそはあらましか(この尼君よりも恐ろしそうな者の中にいたことになるのだろうか)」と思ひやらる(と常陸女には思い遣られます)。 \*「いかさまにせむ」は注に<どうしたらよかろう。意識が働いているので、かえって不気味。>とある。分かり難い注だ。この「いかさまにせむ」の主語は誰か。姫か大尼か鬼か。この主語は<今正に鬼のように見える大尼君>で、「おぼゆる」の主語は常陸女で、「むつかしきにも」は<今のこの不安の中に於いても>と読むのが、下の「これよりも恐ろしげなる」の「これ」を受ける対象を成立させる文意のようだ。非常に分かり難い。が、難文というより拙文に見える。 \*「死なましかば～」は注に<反実仮想の構文。係助詞「か」疑問の意。『完訳』は「鬼と見える尼君から、鬼たちによる地獄の責め苦を連想」と注す。>とある。

[第五段 浮舟、悲運のわが身を思う]

\*昔よりのことを(姫と分かれば大尼君も落ち着いて、その場は収まり、そのまま姫は、昔からのことを)、まどろまれぬままに(寝付けぬ儘に)、常よりも思ひ続けるに(普段以上に考え続けて)、 \*「むかしよりのことを」とあるが、場面が変わったのならともかく、同じ場面が続いていそうな話で、上の話の始末が着かないままに話を続けようとする姿勢は私には到底馴染めない。私なりに始末を着けるような補語をするが、非常に不本意だ。

「いと心憂く(まことに情けないことに)、親と聞こえけむ人の御容貌も見たてまつらず(親と申し上げるらしい父宮のお顔も存じ上げず)、遙かなる東を返る返る年月をゆきて(遙かな東路を何年も過ごして)、たまさかに尋ね寄りて(帰京後に偶々近しく探し出せて)、うれし頼もしと思ひきこえし\*姉妹の御あたりをも(嬉しく頼りに思い申した同父姉の所にも)、\*思はずにて絶え過ぎ(意外な成り行きで途絶えたまま時が過ぎて)、\*さる方に思ひ定めたまひし人につけて(大将殿が側室にとお決めなされた人として)、やうやう身の憂さをも慰めつべききはめに(ようやく不幸な身の上も面目が立ちそうなその真際に)、あさましうもてそこなひたる身を思ひもてゆけば(浅はかな不始末をした自分を反省してみると)、宮を、すこしもあはれと思ひきこえけむ心ぞ(三の宮を少しでも愛しいと思い申した女心が)、いとけしからぬ(大間違いだった)。ただ、この人の御ゆかりにさすらへぬるぞ(偏にこの宮様との御縁の所為で世を流浪することになったのだ)」 \*「姉妹の御あたり」は「はらからのおおんあたり」とローマ字読みがある。そして注には<異母姉の中君。>とある。が、「はらから」は<母を同じくする兄弟姉妹。転じて、一般に兄弟姉妹。>とある。だから、異母姉を「はらから」と言っても間違いではないのだろうが、此処の意味としては<同父姉>なので、ズバリそう言えば良さそうだが、そういう日常語は無いようだ。\*「おもはず」は<意外だ。思いがけなく。>でもあるが<好ましくない。不本意だ。>でもあるようだ。此処では、三の宮の手出しを言っているのだから、その事情を<不本意>と決め付けるよりは<思いがけない成り行き>ぐらいが実態に近いだろうか。 \*「さる方に思ひ定めたまひし」は注に<薫。『集成』は「北の方ではないにしても妻の一人に、という薫の思惑をいう」と注す。>とある。この文は常陸女の内心文なので、客観表現の無い分かり難さは付いて回るが、それにしても「さるかた」を<それなりの処遇>と言って済ますには、あまりにも時代背景が今とは違って中身が分からないので、少々行き違いには目を瞑ってでも具体表現に努めたい。

と思へば(と思うと)、「\*小島の色をためしに契りたまひしを(宮様が私を橘の小島の山吹に例えて愛を誓いなされたのを)、などてをかしと思ひきこえけむ(どうして嬉しく思い申したのだろう)」と、\*こよなく飽きにたる心地す(と、すっかり熱が冷めた気がします)。 \*「こじまのいろ」は、何も昔話ではない。ほんの半年少し前の、匂宮と宇治の向こう岸の小家で遊んだ時の、今年の二月二十日頃の思い出だ。向こう岸へ渡る宇治川の途中で、宮の従者の時方が松の生えた岩を「橘の小島」と言って名所に準えて戯れた印象深い場面は浮舟巻四章三段にあった。その名所の風情を歌った古歌は「今もかも咲き匂ふらむ橘の小島の崎の山吹の花」(古今集春下、一二一、読人しらず)とされていた。恐らくは、その時の常陸女の服が山吹色だったことから、女を「橘の小島」に見立てて、匂宮は愛を誓う歌を詠んだ。その宮の贈歌は、「年経とも変はらむものか橘の小島の崎に契る心は」(和歌 51-08)、とあった。そして常陸女は、「橘の小島の色は変はらじをこの浮舟ぞ行方知られぬ」(和歌 51-09)、と答歌して宮の愛を受け入れたのだった。 \*「こよなく飽きにたる心地す」は決定的な文だ。「飽く(あく、飽きる)」は<満たされる>でもあ

るが、だから<興味を失う>のでもあり、結果の良し悪しに関わらず、それ以上の主体的な進展は無く、自意識の問題である以上、客観的な進展は意味が無いのである。

初めより、薄きながらもものどやかにものしたまひし\*人は(初めから淡泊ながらも落ち着いていらっしやった大将殿は)、\*この折かの折など(宇治山荘へお連れ下さったことや京に新居をご用意下さったことを)、思ひ出づるぞ\*こよなかりける(思い出せば、その誠実さは三の宮と比べ物にならないほど有難い)。 \*「ひと」は間違いなく薫大将なので、左様明示する。 \*「このをりかのをり」は特定し難いが、実質で重要な事柄といえば、宇治山荘へ連れ出したことと都に新居を新築したことだろう。 \*「こよなし」は注に<匂宮と比較して。>とある。が、比較して何処がどうなのかも断定は難しい。まあ、薫殿は<誠実だ>と取って置く。

「かくてこそありけれ(私がこのように生きていた)」と、聞きつけられたてまつらむ恥づかしさは(と、聞き付けられ頂く恥づかしさは)、人よりまさりぬべし(誰よりも大将殿が一番だ)。さすがに(このように身勝手をした私が)、「この世には(現世に於いて)、ありし御さまを(懐かしい大将殿の御姿を)、よそながらだにいつか\*見むずる(遠くからでも何時か見たいものだ)、とうち思ふ(と、符と思うことさえ)、なほ、悪ろの心や(やはり悪業なのだろう)。かくだに思はじ(そういうことさえ考えないようにしよう)」など、心一つをかへさふ(と常陸女は、以前の気持ちを反省します)。 \*「みむずる」は「見むとする(見ようとする=見たくなる)」の音便らしい。

からうして鶏の鳴くを聞きて(漸く鶏の声が聞こえて)、いとうれし(やっとな夜が明けるかと常陸女はとても嬉しい)。「母の御声を聞きたらむは(母の御声が聞けたなら)、ましていかならむ(もっと、どんなに嬉しいだろう)」と思ひ明かして(と心細く思って朝を迎えて)、心地もいと悪し(体調もとても悪い)。\*供にて渡るべき人もとみに来ねば(朝の御世話をしに来るはずのコモキも直ぐに来ないので)、なほ臥したまへるに(姫はまだ横になっていらっしやったが)、いびきの人は(いびき老人の大尼君たちは)、いと疾く起きて(とても早起きして)、粥などむつかしきことどもをもてはやして(粥などの朝食の用意に大きな音を立てて)、 \*「供にて渡るべき人」は注に<女童のこもき。>とある。

「御前に(どうぞ)、疾く聞こし召せ(早く召し上がれ)」

など寄り来て言へど(と近付いて来て言うが)、まかなひもいとど心づきなく(お膳の盛り付けも全くいつもと違って)、うたて見知らぬ心地して(変な見慣れない感じで)、

「悩ましくなむ(気分が悪いので)」

と、\*ことなしびたまふを(と、それとなく断りなざるのを)、しひて言ふもいと\*こちなし(無理に勧めるのもとても粗雑な対応ぶりです)。 \*「ことなしぶ」は<事を荒立てないようにする>。 \*「こちなし」は「骨無し」で<無作法だ。無骨だ。優雅さが無い。>と古語辞典にある。

[第六段 僧都、宮中へ行く途中に立ち寄る]

下衆下衆しき法師ばらなどあまた来て(修行の浅そうな未熟な僧たちが大勢で小野に下りてきて)、

「僧都、今日下りさせたまふべし(僧都が今日、下山なさいます)」(と言うので、)

「などにはかには(どうして急に)」

と問ふなれば(と女房が尋ねたようで)、

「一品の宮の(いっぽんのみやの、女一の宮が)、御もののけに悩ませたまひける(物の怪憑きで患っていらっしゃって)、山の座主(やまのざす、本山の天台座主が)、御修法仕まつらせたまへど(御加持祈祷を上げなされたが)、なほ、僧都参らせたまはでは験なしとて(やはり僧都がいらっしゃらないと効験が現れないと言うことで)、昨日、二度なむ召しはべりし(昨日に二度ほどお呼び出しがありました)。右大臣殿の四位少将(右大臣家のご子息の四位少将が)、昨夜、夜更けてなむ登りおはしまして(昨夜遅くに登山なさいまして)、後の宮の御文などはべりければ(後の宮からのお呼び出しのお手紙などがございましたので)、下りさせたまふなり(下山なさるのです)」

など(と下衆の僧は)、いとほなやかに言ひなす(とても自慢げに言います)。

「恥づかしうとも(恥ずかしいが)、会ひて(僧都に会って)、尼になしたまひてよ(尼にさせてください)、と言はむ(と言おう)。さかしら人少なくて(余計な気を回して邪魔をする人が少なくて)、よき折にこそ(丁度良い)」と思へば(と常陸女は思って)、起きて(起き上がって)、

「心地のいと悪しうのみはべるを(気分がひどく悪いもので)、僧都の下りさせたまへらむに(僧都が下山なさる時に)、\*忌むこと受けはべらむとなむ思ひはべるを(入信儀式を受けようと思いますので)、さやうに聞こえたまへ(そのようにお伝え下さい)」 \*「忌むこと受く(いむことうく)」は<受戒すること。>と大辞泉にある。「受戒(じゅかい)」はざっと、仏道での戒律を守って修行生活を送る約束をすることで、具体的には高僧から入信許可の作法を受ける儀式の事らしく、剃髪もその一つようだ。

と語らひたまへば(と大尼君に相談なされると)、ほけほけしう、うちうなづく(尼君はぼんやりした表情で軽く首肯します)。

例の方におはして(姫は自分の部屋にお戻りになって)、髪は尼君のみ削りたまふを(髪は娘尼君だけが梳かしなさるので)、異人に手触れさせむもうたておぼゆるに(他の人に手を触れさせるのは嫌な気がしたが)、手づからはた、えせぬことなれば(剃髪は自分では出来ないことなので)、ただすこし解き下して(少し自分で櫛を入れてみて)、親に今一度かうながら

のさまを見えずなりなむこそ(親にもう一度髪のある姿を見せられなくなるのが)、人やりならず(自分で決めたこととは言え)、いと悲しけれ(とても悲しいのでした)。

いたうわづらひしけにや(姫自身はずいぶん思い悩んだ所為か)、髪もすこし落ち細りたる心地すれど(髪も少し抜け落ちて細くなった気がするが)、何ばかりも衰へず(実際には少しも傷んでおらず)、いと多くて(量もとても多くて)、六尺ばかりなる末などぞ(六尺にもなる端まで)、いとうつくしかりける(とても美しいのでした)。筋なども(毛並みも)、いとこまかにうつくしげなり(揃って良質でした)。

「かかれとてしも(こうなると思っ、母は髪の手入れをしてくれたはずもないが)」 \* 注に<浮舟の独り言。『源氏積』は「たらちめはかかれとてしもうばたまのわが黒髪を撫でずやありけむ」(後撰集雑三、一二四〇、僧正遍昭)を指摘。>とある。この引歌は、ウェブ検索すると「千人万首」サイトの「遍昭(へんじょう、816—890)」ページに取り上げられていて、訳文は<母は、まさかこのようなことになると思っ、幼い私の黒髪を撫でたのではなかったろう>とあった。「たらちめ」は「たらちね」の誤転で<母>のこと。「うばたまの」は「ぬばたまの」の転で<「黒」に掛かる枕詞>とのこと。で、この歌には「初めて頭おろし侍りける時、物に書きつけ侍りける」という詞書があるらしく、正にこの場面に符合する。

と、独りごちみたまへり(と姫は独り言なさいました)。

暮れ方に、僧都ものしたまへり(夕方に僧都はお見えになりました)。南面払ひしつらひて(南の表廂を片付けて御座所にするように)、まるなる頭つき(丸々坊主たちが)、行きちがひ騒ぎたるも(慌しく掃除しているのも)、例に変はりて(いつになく)、いと恐ろしき心地す(この日の姫には緊張を覚えます)。

母の御方に参りたまひて(僧都は母尼のお部屋に参じなさって)、「いかにぞ、月ごろは(最近の体調はどうですか)」など言ふ(と言います)。

「\*東の御方は物詣でしたまひにきとか(東部屋の尼君は初瀬詣りにお出掛けなされたそうな)。\*このおはせし人は(此処にいらっしゃった貴女は)、なほものしたまふや(残っていらっしゃいますか)」 \*「ひむがしのおおんかた」は注に<妹尼君は東の対を居所としている。>とある。妹尼君を僧都は「東の御方」と呼称する。母君に対しての第三人称なのか、一般的な第三人称なのか、そこそこ客観性がある言い方で使い勝手も良さそうだが、一先ずはこの場面だけの言い方にしておく。 \*「この」は<寝殿・正殿>で、母尼君は北奥の水回りに近い部屋に住み、常陸女は西母屋に居た、くらいに思っ良いのだろうか。一応そう思っおくが、この尼庵の規模や間取りの説明が少なく、本当に頼りない。

など問ひたまふ(と僧都は尋ねなさいます)。

「しか(そうです)。ここにとまりてなむ(出かけずに、残っています)。心地悪しとこそものしたまひて(体調が悪いと仰っ)、忌むこと受けたてまつらむ(入信して救われたいと、あなたに授戒して頂きたい)、とのたまひつる(と言っいらっしゃいます)」

と語る(と母尼は話します)。

[第七段 浮舟、僧都に出家を懇願]

立ちてこなたに\*いまして(僧都は母尼の部屋を立ち去って姫の部屋に向かいなさって)、  
「ここにや、おはします(此方にお出でですか)」とて(と言って)、几帳のもとについみたま  
へば(几帳の前に膝付きなさると)、つつましけれど(姫は気後れしたが)、ゐざり寄りて(居  
座って近寄り)、いらへしたまふ(お返事なさいます)。 \*「います」は<「在り(あり)」「居り(を  
り)」の尊敬語。>とあるが<「来(く)」「行く(いく)」の尊敬語。>ともあり、此処では後者の語用だろう。

「不意にて見たてまつりそめてしも(偶然にあなたにお目にかかり申しましたのも)、さる  
べき昔の契りありけるにこそ(そうなる昔の縁があったからだ)、と思ひたまへて(と存じら  
れましたので)、御祈りなども(回復のご祈祷なども)、ねむごろに仕うまつりしを(念入り  
にお上げ申しましたが)、\*法師は(僧侶は)、そのこととなくて(特に用も無しには)、御文聞こ  
え受けたまはむも便なれば(女人とのお手紙の遣り取りも破戒となりますので)、自然にな  
むおろかなるやうになりはべりぬる(どうしても疎遠になってしまいます)。いとあやしきさ  
まに(とても風変わりな)、世を背きたまへる人の御あたり(出家なさった尼僧の御側は)、い  
かでおはしますらむ(どういう住み心地ですか)」 \*「法師(ほふし)」は<導師。僧。出家者。>  
と古語辞典にある。僧都が自らを「法師」というのは面白い。教師が自分を「先生は」というのに似ているのだ  
ろうか。だとしたら、何となく自律に甘い人柄に思えて、親しみもあるが頼りない。

とのたまふ(と僧都は仰います)。

「世の中にはべらじと思ひ立ちはべりし身の(死んでしまおうと決心した私が)、いとあや  
しくて今まではべりつるを(不思議と今まで生きておりますのを)、心憂しと思ひはべるもの  
から(情けなく思いますものの)、よろづにせさせたまひける御心ばへをなむ(いろいろと御  
世話頂いた皆様のご親切を)、いふかひなき心地にも(言葉も無いほど感謝申し上げる気持ち  
も)、思ひたまへ知らるるを(思い知らせておりますが)、なほ、世づかずのみ(やはり世間  
に馴染めず)、つひにえ止まるまじく思ひたまへらるるを(どうしても現世に留まっては居ら  
れないと存じられますので)、尼になさせたまひてよ(尼にしてくださいませ)。世の中には  
べるとも(生きてはいましても)、例の人にてながらふべくもはべらぬ身になむ(普通の人の  
ようには生きていけない身なのです)」

と聞こえたまふ(と姫は申しなさいます)。

「まだ、いと行く先遠げなる御ほどに(まだ先のあるお若さなのに)、いかでかひたみちに  
しかば、思し立たむ(どうして一途にそう思い込みなさるのですか)。かへりて罪あることな  
り(入信した後の間違いは、却って罪作りです)。思ひ立ちて(考え抜いて)、心を起こしたま  
ふほどは強く思せど(出家を決心なさった時は強い気持ちでも)、年月経れば、\*女の御身と  
いふもの(年月が経つと、女の身体というものは)、いと\*たいだいしきものに\*なむ(とても

始末の悪いものと聞いております)」 \*「女の御身」は「をんなのみ」とローマ字読みがある。注には此処の文意をく『集成』は「将来、不慮の間違ひでもあつてはと危ぶむ」。『完訳』は「女の身は実に不都合。前に妹尼も若い女の出家には疑問を抱いていた」と注す。>としてある。 \*「たいだいし」は古語辞典にく不都合である。怠慢である。軽率だ。>などとあるが、語感が掴めない語だ。 \*「なむ」は強調の係助詞とも説明されるが、「ものになむ」はくものというように>と一度視点を変えて対象を総体として置き離して見た言い方で、下に<聞き侍る>が省かれた定型の曖昧表現の言い回しかと思う。

とのたまへば(と僧都が仰ると)、

「幼くはべりしほどより(私は幼い時分から)、ものをのみ思ふべきありさまにて(あれこれ思い悩む性格で)、親なども、尼になしてや見まし(親も尼にさせようか)、などなむ思ひのたまひし(と思ひ言いなさっていました)。まして、すこしもの思ひ知りて後は(まして少し物心付いてからは)、例の人ざまならで(普通の人とは違って)、\*後の世をだに(せめて来世に幸を託して修行するために出家したい)、と思ふ心深かりしを(と思う心が深くなりましたが)、亡くなるべきほどのやうやう近くなりはべるにや(本当に死期が近付いたからなのか)、心地のいと弱くのみなりはべるを(体調がとても弱くなりましたので)、\*なほ(今の内に)、いかで(どうか受戒を受けさせてください)」 \*「のちのよをだに」は分かり難い。「後の世」は<死後の世>とも<生まれ変わった来世>ともあり、また<来世での安楽>でもあるらしい。現世での幸せは諦めて、来世での幸せを願って修行生活で善行を積むために出家する、みたいなことだろうか。生まれ変わりは地上生物に共通の基本的な生存原理はあるだろうから、割と誰でも類推し易い空想だろうが、こういう分かり難い言い回しで崇高さを演出しようとしているなら、仏教などの宗教は本当に底が浅い。 \*「なほ」は<今でも、まだ、やはり>という語用が多いが、此処では<さらに、いっそう→今こそ>くらいの語調に見える。

とて、うち泣きつつのたまふ(と姫は泣きながら言いなさいます)。

[第八段 浮舟、出家す]

「あやしく(不思議に)、かかる容貌ありさまを(こんな美しい人が)、などで身をいとはしく思ひはじめたまひけむ(どうして人生を嫌に思い始めたのだろう)。もののけもさこそ言ふなりしか(物の怪もこの人が死にたがっていたと言っていたが)」と思ひ合はするに(と思ひ合わせると)、「さるやうこそはあらめ(それなりの深い事情があるのだろう)。今までも生きてるべき人かは(普通なら、今まで生きていられなかった人かも知れない)。悪しきもの見つけそめたるに(悪霊が目を着けているのだから)、いと恐ろしく危ふきことなり(このままでは、また見入られて、どんな目に遭うかもしれないから、実に恐ろしく危険な事のように)」と思して(と僧都はお思いになって)、

「とまれ、かくまれ(とにかくも入信を)、思し立ちてのたまふを(決心して出家を申し入れなされるのは)、\*三宝のいとかしこく誉めたまふことなり(仏様がとても立派だとお褒めなされることです)。法師にて聞こえ返すべきことにあらず(僧侶の立場で反対申せることではな

い)。御忌むことは(御受戒の儀は)、いとやすく授けたてまつるべきを(特に造作も無くお授け申せますが)、急なることにまかんでたれば(急用があつて山から出て来ましたので)、今宵、かの宮に参るべくはべり(今夜は六条院に参らねばなりません)。明日よりや、御修法始まるべくはべらむ(明日から、女一の宮の御回復の祈祷が始まる予定です)。七日果ててまかでむに(七日後に終わりますので)、仕まつらむ(その後で受戒式を致します)」 \*「三宝(さんぼう)」は<仏語。仏と、仏の教えである法と、その教えを奉じる僧の三つの宝。仏・法・僧。>また<仏の異称。>と大辞泉にある。この辺の事は分からないし、興味も持てない。

とのたまへば(と仰るので)、「かの尼君おはしなば(あの尼君がお帰りになったら)、かならず言ひ妨げてむ(きっと出家に反対して邪魔をする)」と、いと口惜しくて(と姫は、受戒が後日になるのが、とても心外で)、

「乱り心地の悪しかりしほどに見たるやうにて(以前の不調の時に似て)、苦しうはべれば(今はとても辛いので)、重くならば(後で症状が悪化したら)、忌むことかひなくやはべらむ(受戒の甲斐も無いはかない有様になってしまうかもしれません)。なほ(やはり)、今日はどうれしき折とこそ思ひはべれ(今日が好日と思われます)」

とて、いみじう泣きたまへば(と切実に懇願なされると)、\*聖心にいといとほしく思ひて(僧都は功德を尊ぶ心から姫に憐憫の情を覚えて)、 \*「ひじりごころにいといとほしくおもひて」は与謝野訳文に<単純な僧の心にはこれがたまらず哀れに思われて>とある。どうして、そういう言い換えが出来るのか不思議だが、気分は徙いたい。

「\*夜や更けはべりぬらむ(今から京へ向かうと、どうせ夜更けになってしままいそうだ)。山より下りはべること(山を下りるのは)、昔はこととおぼえたまはざりしを(昔は何とも思わなかったが)、年の生ふるままには(年を取ると)、堪へがたくはべりければ(大儀になってきたので)、うち休みて内裏には参らむ(此处で一休みしてから参内しよう)、と思ひはべるを(と思ひますので)、しか思し急ぐことなれば(あなたがそのように出家を急いでいらっしゃるなら)、今日仕うまつりてむ(今日受戒を授けましよう)」 \*「よやふけはべりぬらむ」は<夜が更けてしまうから先を急ぐ>のではなくて、先を急いでも<どうせ夜更けになってしまうから、ゆっくりする>という意味らしい。ただ、ゆっくりすると言っても、明日からの御修法は決まっているので、ちょっと休むということらしいが、その僅かな時間で出家式を済ませるらしい。

とのたまふに(と仰るので)、いとうれしくなりぬ(姫はとても嬉しくなりました)。

\*鈿取りて(姫がハサミを取り出して)、櫛の篋の蓋さし出でたれば(整髪道具箱の蓋に載せて差し出すと)、 \*「はさみとりて」は注に<以下の動作の主体は浮舟。>とある。敬語は無いが、文意からして主語は常陸女だろう。

「いづら、大徳たち。ここに(さあ、大徳たち、此处に参れ)」



と呼ぶ(と僧都が呼びます)。初め見つけたてまつりし二人ながら供にありければ(宇治院で姫を初めに見つけた阿闍梨の二人が供に付いて来ていたので)、呼び入れて(僧都は二人を部屋に呼び入れて)、

「御髪下ろしたてまつれ(御髪を下ろして差し上げなさい)」

と言ふ(と言います)。げに(確かに)、いみじかりし人の御ありさまなれば(発見当時は化け物めいた姫の御様子だったので)、「うつし人にては(普通の人としては)、世におはせむもうたてこそあらめ(生きているのも辛いのだろう)」と、この阿闍梨もことわりに思ふに(と、この阿闍梨も出家も止むなしと思うが)、几帳の帷子のほころびより(几帳の垂布の隙間から)、御髪をかき出だしたまひつるが(御髪を外へ揃えてお出しなさっているのが)、いとあたらしくをかしげなるになむ(切るには実に惜しく美しいので)、しばし、鋏をもてやすらひける(阿闍梨はしばし、ハサミの手を止めていました)。